

C(電話017・764・5200)へ。
(大友麻紗子)

巨大なマメコバチの彫刻などを展示している塚本さん

手が加えられ、コントロールされる動物をテーマに、木彫や石彫など20点を展示している。

されて生まれた金魚「津軽錦」などに共通点を見だし、題材にしてきた。今回の主な題材は、リンゴの授粉を媒介するマメコバチ。花の時期に合わせるため冷蔵庫に入れられるなど、人間にコントロールされている点に注目した。

会場には、素焼きで複製された5匹ほどのマメコバチがずらり。633個すべてに番号が振ってあり、塚本さんは「同じようで一つずつ違うことを表現したかった」と話す。発泡スチロールと石こうで作った巨大なマメコバチの彫刻、黒石市のりんご史料館でのリサーチを基に描いたモニタージュなどのほか、家畜である羊やウサギ、ニワトリなどを表現した石彫も並ぶ。

同展は6月16日まで。入場無料。5月25、26日に塚本さんのワークショップを行う。問い合わせはACA

人の手加えた自然彫刻と重ねて表現

塚本・弘大教授
ACAで個展

彫刻家で弘前大学教育学部教授の塚本悦雄さん(56)の個展「彫刻ファーム」が、青森市の青森公立大学国際芸術センター青森(ACA)で開かれている。人の



ゆかりの作家を紹介する「ヴィジョン・オブ・アオモリ」として企画した。塚本さんは熊本出身、東京芸術大学大学院美術研究科修了。2011年に弘大に赴任した。彫刻とは自然のものに人の手を加え、自然現象を作為的に作り出すことではないかと仮定し、農園の作物や人為的に交配